

ながつか  
長塚

たかし  
節

農民文学『土』の作者 常総市



(常総市教育委員会提供)

明治12年(1879) - 大正4年(1915)。岡田郡国生村〔常総市〕生まれ。小学校卒業後、茨城県尋常中学校〔水戸一高〕に入学。健康すぐれず4年時に退学。明治33年(1900)、正岡子規に入門し万葉集の歌風を学ぶ。同36年(1903)、雑誌『馬酔木』の編集同人として活動。同40年(1907)、家運挽回のため炭焼きの研究と竹林の栽培等に努める。地域振興のため村青年会を発足させ、青年指導や農村振興に貢献。同41年(1908)、伊藤左千夫らと短歌雑誌『アララギ』を創刊。同43年(1910)、『土』を夏目漱石の推挙により朝日新聞に連載。その後療養生活を送りながら、大正3年(1914)から4年(1915)にかけて晩年の大作『鍼の如く』231首を詠む。

長塚節は、岡田郡国生村〔常総市〕の豪農であった長塚家の長男として生まれました。節は小さいときからもの覚えが良く、3歳でいろは歌を読み、百人一首を暗唱するなど、周囲の人たちからは神童とか天才といわれたそうです。その後、地元の尋常小学校、下妻の高等小学校を卒業すると、茨城県尋常中学校〔水戸一高〕に一番の成績で入学しました。この中学時代には、文学が大好きで、節は文章会を作って友達と活動し、歌や文章を作って発表していました。しかし、病気になって4年生の時に、郷里に帰りました。その後、温泉で保養したり、自然に親しんだりして、病気を治すための生活をしました。

明治31年(1898)、『日本』という新聞に掲載された正岡子規の『歌よみに与ふる書』を読み、節はたいへん感動します。

(これこそ、自分が求めていたものだ。すばらしい。子規にすぐに会ってみたい。そして、歌やいろいろなことを話したい。)

こう考えた節でしたが、病気療養中でもあり、その思いはすぐには実現しませんでした。そこで、節は子規の短歌をまねてつくり、一生懸命短歌の勉強を続けました。

やがて、明治33年(1900)3月にその願いがかない、子規の門下に入り、教えを受けるようになります。3度目に訪ねたとき、一本の線香が燃えつきるまでに、歌をつくるようにいわれました。子規にいわれるままに、10首ほどの歌をつくりました。

この歌が、節の誕生日である4月3日に『日本』に発表されました。節は、この驚きと喜びを、「忘るべからざる楽しい日」と書いています。節にとって子規は、文学を通して人生を教えてくださいました。すばらしい先生だったのです。

子規の死後、伊藤左千夫らとともに、師の教えを受け継ごうと先頭に立って活動しました。



『土』の原稿 (常総市教育委員会提供)

雑誌『馬酔木』の発行にも努力し、編集同人として、短歌や歌論、写生文などを発表しました。このころから、節は短歌から写生文へ、さらに小説へと活躍の場を広げていきました。特に、明治41年(1908)からの2年間は、『ホトトギス』や『アララギ』という雑誌に小説を意欲的に発表しました。

明治43年(1910)に夏目漱石の推せんによって、『土』が『朝日新聞』に連載されるようになりました。漱石は序文で、「たいへん貧しい農民を主人公に、鬼怒川の景色や四季の様子など、この地方の特色をよく描いている。」と書いています。

その後も節は、小説を書くための資料集めに精を出しますが、家業である農業にも取り組み、特に竹林栽培に熱心で、肥料の研究も行いました。

(自分が作ったダイコンはカブより甘いぞ。肥料のぐあい一つで味まで変えられるぞ。竹も同じだ。肥料を研究して、すばらしい竹林を作ってみせるぞ。)

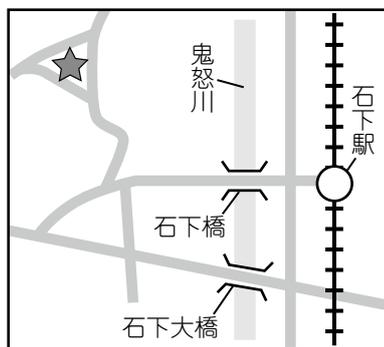
こうして、節は茨城県でも有数の竹林の経営者になりました。何事にも一生懸命だった節でしたが、病気のため、大正4年(1915)2月8日に亡くなりました。まだ、36歳の若さでした。節が健康で長生きしていたら、きっと文学、農業の分野でさらに良い仕事をたくさん成し遂げたことでしょう。

## ゆがりのスポットに行ってみよう

### 長塚節の生家

所在地 常総市国生 1303

内容 豪農にふさわしい百坪の母屋と書院が保存され、母屋は現在も住居として使用されています。



### おもな 参考文献

『茨城の先人たち』(茨城県地域学習資料研究会・1983)

『郷土の先人に学ぶ』(茨城県教育委員会・1986)